

モンテーニュの「見ること」  
——『自然神学』翻訳から「エッセー」へ

奥村 真理子

「エッセー」について語るとき、モンテーニュは視覚に関わる表現を頻繁に用いる。「私が描くのは私だ」、「私の肖像」、「私の自然な通常の歩みを見てほしい」、「私は私の内を見る」、「私の視力を知らせる」……著者自身が常識外れの「大胆無鉄砲さ」を自認するこの作品の独創的な試みに、視覚の概念が密接に結びついていることは明白である。

1569年にモンテーニュが翻訳を出版したスボンの『自然神学』では、〈見る〉という概念を活用した証明法と認識論が一貫して用いられている。そこでは人間が、人間の義務も罪も秘蹟の意義も、外界の事物や経験などの〈見えるもの〉を介して〈見えないもの〉を〈見る〉。何よりも、自己を見失った人間が、「可視の世界」である「被造物の書」を〈見る〉ことにより、自己を〈見る〉のである。

スボンの原文とモンテーニュの翻訳を比較対照すると、モンテーニュがこの〈視覚的〉証明法・認識論を忠実に再現するのみならず、文体以上に内容を考慮して、原文に縛られず自由に適用して訳したことが分かる。「見ること」を、認識の対象と文脈に応じて弁別する、明確な意識を読み取ることができるのである。特に、神に関する認識と自己認識に関わる箇所は、「エッセー」における神と人間の領域の校別と飽くなき自己考察を發露とさせる。

この比較対照の結果を踏まえて「エッセー」を検証すると、スボンの〈視覚的〉認識論が彼自身のものとして応用されたことが分かる。それは単に外界の物事を「見る」ことに止まらず、判断の試しの方法、「自己を見る」方法に取り込まれ、彼自身の方法に変換した形で実践されている。スボンにおける人間の自己認識は「キリスト教的ソクラテス主義」である。また、モンテーニュはスボンの信仰心に支えられた人間理性による証明を評価したが、彼自身は人間理性に懐疑的だった。スボンが最も確実な論拠とした経験にも留保条件をつけていた。さらにスボンは、「個人が自己の魂の内に経験によって見ること」が他者にはその人自身ほど明白に認識できず、「*nec potest alicui communicari*」とした。モンテーニュは、自己の内に神の御業ではなく自己の思考の働きを見、その記録を人間理性と経験の限界の認識に基づいて「私の視力を知らせる」「試しの数々」とし、「神の似姿」ではなく「私の肖像」として読者に「見てほしい」と望むことで他者への伝達を試みているのである。

モンテーニュの〈視覚的〉認識の意識は、遅くとも『自然神学』の翻訳を仕上げた時期、すなわち「エッセー」執筆以前に充分明確に形成されていた。それがさらに「エッセー」において彼自身のものとして実践されたのである。

(広島大学助手)